

きたかみ景観人養成講座(1回目)

【日時】平成21年10月18日(日)10:00~16:00

【会場】北上市生涯学習センター 第1学習室

参加者:37名

1. あいさつ

北上市 都市計画課

「美しい景観を次世代へ」ということで、市民の皆様への絶大な協力をいただきまして、9月30日、市民・事業者・行政の協働による景観形成に取り組む趣旨で、景観計画づくり、景観条例を制定しました。これから市民の皆様へ啓蒙し、取り組んでいくところです。

今回の景観人養成講座は、たくさんの方にご出席いただき、ありがたく思っています。景観人養成講座で勉強していただき、また地域に戻りましたら、リーダーとして景観形成に取り組んでいただきたいと思います。

北上市の美しい景観を守り、つくり、育てるということで、皆様のご協力を宜しく申し上げます。

2. 講座

「景観とまちづくり」

弘前大学教育学部副部長 北原 啓司 氏

景観は、つくる人、見て喜ぶ人、見てがっかりする人、関わる立場はいろいろあります。みんなをひっくるめて、私は景観人と呼びます。



○景観人のススメ

景観を「つくる人」と「たべる人」に分けます。景観をつくる人とは、建築物をつくる人、道路や

橋をつくる人も「つくる人」です。つくる人はたべる人に、規制したり奨励したりします。一方、「たべる人」はその景観を愛でたり憂いたりします。それが景観を「つくる人」と「たべる人」の関係性です。

行政も住民もみんな「景観人」です。今日は、景観を「たべる」景観人を目指します。北上市は景観形成計画ができましたが、それに対して、景観人として北上市の景観を学んでいくのが景観人養成講座の主眼です。「景観人」を育む教育こそ、景観施策の切り札であり、景観を「つくる」のではなく、舌の肥えた景観人を育てることが重要です。

○発見的方法による「景観をたべる学習」

・発見的方法とは

景観人として養成しなければならないのは、目に入るものすべてを、他の人が気付かなかったことを含めて吸収する力です。小学校へ行って、景観点検を一緒にする機会があるのですが、子供たちのほうがその辺はピュアで、地域から学びとる子供たちの眼差しには注目させられます。

見てきたものをそのままにして終わりではなく、なぜ自分はそれを選んだのか考えるということが大事です。調べてきたものが、実は30年前だったらこういう風に見えたものが、今はこう見えてしまっているということから、その地域の問題が見えてきます。

例えば、ホテルもそうです。たまたま、ホテルの灯りの写真を撮ってきて、調べてみたら、うちのおじいちゃんに「そんなもの、昔はいっぱいいた。」と言われます。その事実から、それはホテルが素晴らしいのではなく、昔はもっといっぱいいたところから、川の整備が始まっていきます。

見つけたことを動機づけにして調べていくなかで、何がまずいのか考えていって、そこからある種の提案をしていく。そういう意味で、見つけて、調べて、考えて、創り出していく、この方法を発見的方法といいます。

・生きる力を育む授業

実は文部科学省が1999年、総合的学習をやりなさい、詰め込み教育ではなく、考えられる子どもを育てなさいと打ち出し、2002年から総合的学習が始まりました。残念ながら、教育委員会のほうでそれを「ゆとり学習」という言葉に換えてしまったので、金曜日の午後に、みんなでどこかを見に行こうという授業ばかりにして、実はこれを教えませんでした。

文部省の文章にはちゃんと「生徒自らが地域の課題を見つけ、調べあげ、考えて、提案する」と書いてあります。それによって、「生きる力を育む」とあります。その地域で生きていく力です。今あるものを生かしながら、場合によっては、新しいことを思い切ってやってみながら、生きる力を育むのです。記憶力ではなく、生きる力を育む授業を文部省はやるようとしたのです。

残念ながら今、学力が落ちてきたのはあのせいだと言われて、時間が減ってきましたが、むしろ、私は今、皆さんがやろうとしている景観点検も含めて、自分たちの地域をしっかりと見つめ、しっかりと考えていくということを景観学習というかたちでやっていただきたいと思います。

○発見的方法を自分たちのものにする

・発見的方法を自分たちのものにする

今日の講座のねらいは、発見的方法を自分たちのものにするということです。地域の景観について、生きる力を身につけるということです。

残念ながら、われわれ大人は、悪いわけではないですが、ある種、あきらめや慣れがあって、もしも40年前なら「ひどいな」と思った景観も、ずっと見て慣れてしまうと「そんなもんだろう」と思ってしまいます。ですから、すごくキツイ色の建物であっても1週間、1か月、1年と過ぎていくうちに慣れてしまいます。

一方で子どもは、慣れやあきらめはありません。なぜ、私が子どもたちと一緒に仕事をしたいかという、時々、水泡を吹きかけられるようなことを言うからです。「人前で授業をしている割には、僕にもあきらめや慣れがあったなあ」と思います。皆さんには、いっぺん、頭の中の先入観を取って、純粹になっていただきたいと思います。

・「風の人」と「土の人」

外から来た人と歩いてもらうことによって、いい

ものについてはすごくいいと褒めてもらえるし、まずいものはまずいと言われます。たとえ、いいものでも見慣れてしまうと、そんなものだと思ってしまいます。本当はそんなものではないのです。それが、子どもと大人、外の人と地域の人の違いです。

私はこれを「風の人」と「土の人」と言っています。土の人は自分の地域のいい景観を見慣れてきているうちに、土ぼこりがかぶってくると、せっかくのいい景観が消えてしまい、気づきません。一方で、見せたくないものは土ぼこりで隠します。そこに風が吹くと、土ぼこりが上がった瞬間に隠してきたものが見えてしまいます。あるいは、気づかなかったいいものが見えてきます。いいものも悪いものも、地域の人たちがずっと土で隠していたものを、外から来た子どもや外来者が風を吹かせます。

景観点検は、地域住民であっても、そういった感覚で見ると、地域の景観がまた一歩進むような気がします。ご存じの場所であっても、再度もういっぺん、じっくり見てみよう、そこから何か気付くかもしれないということです。

○まち歩きに必要な5つの視点

今年の8月に、うちの学生8人ぐらいを連れて、むつというところに行き、むつの中学生に同じような授業をしました。最初、私が授業をして、その後、半日歩いて写真を撮ってきたものから、最後はパソコンを使って、このまちでこんな生活をしたいという視点から物語を作ってもらおうという授業をしました。私は相手が60歳でも13歳でも同じことを言います。

① 答えは場所に必ずある

これは実は、持続可能性ということばを唱えたヨーロッパの建築家の条件の一つに入っています。

今回、撮った写真というのは、何かピンときたから撮ったわけで、その写真をずっと見ることによって大事なことが見えてくる可能性があります。無駄な写真は一枚もなく、

撮ってきた写真を表舞台に出してあげることを考えると、いろいろなことに気付きます。

私が昔、行った授業の例をご紹介します。つばさ君が幼稚園の時に、まちを歩いて気がついた景色を写真に撮ってもらい、それをコラムで連載していました。

・つばさ君の弘前たんけん（その1 ひまわり）



これは駐車場です。その壁にはひまわり畑が描かれているのですが、このひまわりは相当素晴らしい絵なんですね。というのは、遠近法が使われているので、見ようによっては本当にひまわり畑があるような錯覚を起こします。こういう景色は、いつも見ている人にとっては、「ああ、弘前第三中学校の前のひまわりが描いてある壁ね」で終わってしまいます。わたしが子どもたちに言うのは、この写真を撮ってきて、そのときに君たちがやることは「いったい誰がどういう意味で描いたのか」を調べて始めて、受け取ることができるので、どういう経緯でこれができたのかを調べてこなければいけないと言っています。

このひまわりの壁ができた経緯を調べたところ、今から何年前に、向こう側にある弘前第三中学校の美術部の学生たちが卒業前に、壁画を描いたりするのですが、外に対して描いてみたいということで、不動産屋さんをお願いをしたところ、「いいねえ。殺風景なのが変わるから。」という話になり、それを十数年おいてきました。

このようにして、まちの景観にかかわる市民というのは、普段は「食べる人」たちが、自分たちで「こんなの食べてみたらどうですか」と出してみる、そういうのをまちを歩いていると気づきます。

それを我々は、麻痺していると、「あそこにひまわりがあるね」「知っているよ」となりますが、それは知っていることになりません。景観は、その景観ができた意味を感じるべきです。

・つばさ君の弘前たんけん（その2 へんしん!）

このお店は味噌や醤油を売っている古いお店です。寺町にあるので、白い漆喰の壁と黒い木で、シック

なお店を作っています。ですから、殺風景なクーラーの室外機を、大工さんに頼んで同じような木で囲ってもらっています。



ある小学校でこの写真をパッと見せたら、この場所がどこかわかる子が3人いました。子どもたちのなかには、「クーラーを隠すくらいなら、たばこの自動販売機もどうにかできたはずだ」と言う子がいました。それは正論です。子どもたちの目から見たら「そこまでやるんだったら」という考え方です。大人だったら、「頑張っているな、こっちは仕方ないな」となりますが、実はやりようはあるのです。

北上の景観計画の中でも、自動販売機の色に何か規制はできないかという議論がありました。赤い色やどギツイ色があると、景観を悪くするのではないかということです。しかし、企業側から言うと、例えば、コカ・コーラは全国共通で赤なので、それを規制するわけにいかないだろうということで、今回は、それを控えめにすることにしました。

しかし、ものは考えようで、赤い自動販売機でも、その人に想いがあれば違うかたちでやろうとしてもいいわけで、全国を見ていると、コカ・コーラの自動販売機を木で覆っている所もあります。ですから、あとは規制ではなく、その景観に手を加える創造の部分です。このお店のオーナーはここまでやりましたので景観人だと思います。そのような意味で、景観人を養成していかないとこの空間はいつまで経っても変わらないし、コカ・コーラは赤いままで。

ヨーロッパではコカ・コーラは赤い色を使いませんが、サークルKは普段派手な色のコンビニなのですが、愛・地球博では初めて、シックな色合いのサークルKをつくりました。そういうこと自体、景観人の気持ちを持った人がやるべきことだし、我々、見る側、食べる側は「がんばっているね」と言ってあげることによって、景観は変わってきます。

・つばさ君の弘前たんけん (その3 どこでもドア)



弘前に禅寺が3軒並ぶ禅林街というのがありません。不思議な空間で、その道路はトラックも通るのに、まるで境界のように門があります。向こうに入っていくとお寺のまちです。この写真をパッと見たときに、「どこでもドア」と名付けました。

「この門に入っていったら江戸時代に行けそうな気がする、水戸黄門が歩いてくるような気がする、でも、だめだ。電信柱があるから水戸黄門が歩けない。」というような書き方をしていました。そしたら、弘前市役所都市計画課の景観の係長が「そんなことを書かれた、絶対言わせない」ということで、電信柱を消しました。

しかし、この消し方が問題で、電柱を地中化するのが一般的な方法ですが、お金がかかるので東北電力に断られました。そこで、杉の木が立ち並ぶ中に、電信柱を覆う義木を入れ、電線も隠しました。言ってみれば、これはごまかしですが、向こうにある津軽藩の菩提樹が見える景観を大事にしたいという思いがあれば、杉の葉が茂っていれば電線も隠せるし、杉の何本かに1本が電信柱が入っているとわかっていても、この光景を留めることはできます。

こういった工夫は、景観をつくる人とたべる人が一緒に取り組みできたというのは、電線を地中化するよりも、頑張ったなと褒めてあげたいです。そして、お寺の方々も褒めてあげたいです。お寺の方々は、景観協定とかルールを作ったわけではなく、これを可能にするために電信柱を木の間に立てることを許しました。所有権から言うと、ここはお寺の土地で、自分の土地に電信柱を立てることを許したのです。

景観というのは、「こうだったのか」と調べていく

と、そこにいろいろな工夫やみんなでのやり取りが見えてきます。そういう意味で言うと、たった一枚の写真でも気づくことがあります。



・一枚の写真が物語る意外な遊び心

これは東京の杉並区を通った時に撮った写真です。そのときに学生が「東京の人たちは土地がないから、自分の家の前をたくさん飾りたいんですね」と言い、わたしもこのときはそう思いました。あとで、写真を引き伸ばして、スライドで見たら、この人はただ単に前を飾っているのではなく、そうとう思い切ったことをしていたことがわかりました。何かというと、電信柱を私物化して、釣り鉢をぶら下げています。全然違和感がありません。これは人それぞれにやっている景観の遊び心です。

② 中途半端な予見はいらぬ 純粋な子供の眼差しで…

私は青森県でここ6年くらい、小学生に景観教室をしています。小学校4年生はまだ「景観」という字を習っていませんが、景観がどういうことかは知っています。

1. 「景観(けいかん)」ってなんだろう？

景観(けいかん)

景: 景色(けしき)、風景(ふうけい)

観: みること

★でも、どうして、「見る」という漢字を使わないのでしょう。

「景」が景色、風景、これはみんな知っています。「観」は、観ることだと言います。私はちょっとびっくりしたのですが、「見る」とはどう違うのかあえ

て聞きました。

これは、皆さんにも聞きたいのですが、「観る」は「見る」とどう違うのでしょうか。「観」は、客観・主観の観で、ただ視覚的に見るというのではなく、しっかり感情化して見るということです。見て好きだと思う、見て不思議だなと思う、見て嫌だと思う…見た後の反応こそが景観だと思います。だから、「残念だな、なんとかしなきゃ」と思うし、または、「いいなあ、誰かに見せたい」と思い、写真を撮ります。

同じ風景を見ても、それぞれ違う考えを持っていたり、それぞれ違う原風景をもった人々が歩けば、ある人はシャッターを押してもある人は押しません。同じ風景を見ても、感じることは皆違うので、撮りたい写真は変わってきます。ですから、今日のような景観点検でお願いしたいのは、撮りたいと思ったときは、「撮って」というのではなく、「カメラを貸して」と言って撮るべきです。その時の写真を後で見ながら、「そういうことか」と考えていくことが大事です。

・イギリスの景観学習

イギリスでは景観学習を小学生のころからやっています。調べてきたものに対して、自分たちで評価をします。「Good」いい景観、「Bad」悪い景観、「Ugly」です。「Ugly」とは、醜いアヒルの子で表わされるように、「ちょっと変わっている」という意味です。

ですから、「Good」はニコニコの顔、「Bad」は怒っている顔、「Ugly」は良くも悪くもない、どっちつかずの顔のマークです。日本人だったら、良い・悪い・普通と言いますが、普通の景観なんてありません。

★ いいもの・わるいもの・気になるもの(イギリスの学校)



「Good」の下には、「I want to Keep」残したい、「Bad」の下には「I Want to get it」取り除きたい、

「Ugly」の下には「I want to improve」改善したい、なんとかしたいとあります。

なんとかしたいと考えさせるのが、イギリスの景観教育です。景観に対して、子どもたち、市民がどう主体的に関わるかということに力を入れています。子どもたちのシートをもらってきましたが、子どもが一番反応するのが「Ugly」なんとかしたい、です。

麻痺したり、あきらめが入ると、「Ugly」なんとかしたいは減ってきます。

これを弘前の子どもたちにもやってもらいました。好きな景観、気になる景観です。弘前の中三デパートの上には、よくわからない構造物があります。これを作ったのは、日本でとても有名な建築家です。ただ、いくら有名な建築家だろうと、子どもたちにとっては、よくわからない景観で、この写真のタイトルは「カップラーメン!？」です。言われてみると、そんな感じもします。

誰がつくったから素晴らしい建物だ、ではなく、直感的に見て嫌なものは嫌なのです。

・そのままにしておく弘前市役所が悪いと思う!



潰れてしまったスーパーの写真です。「そのままにしておく弘前市役所が悪いと思う!」というコメントが付いています。われわれ大人は「子どもらしいな」と思い、一緒に行った大学生の女の子も「弘前市役所が悪いわけではなく、マルホンさんが潰れてしまって、次の買い手がつかないからそのままになっているのよ」と言いました。

すると、この写真を撮ってきた男の子は、「そんなことは知っているよ」と言いましたが、「ではなぜ、弘前市役所が悪いと思うの?」という問いへの男の子の答えが、とても心に残っています。「僕はいつもここを学校帰りに歩くんだよ。冬の11月12月は真

っ暗。そういうときに、ここの前を通ると、潰れてしまったスーパーの向こう側から僕を見ている人がいる。おばけか誘拐犯だ。すごく怖いから、僕はここを通るときは道路側を見ながら、バーッと走る。それを2年間も続けてきているんだ。そんな気持ちの悪い場所をそのままにしておくのは弘前市役所が悪い。」と言ったんです。

つまり、「ここは公共の場でみんなが見ている場所なのに、このまま置いておいて何も手が出せないというのは弘前市役所が悪い。」というのは、これは市役所の人にとってとても大事なメッセージだと思います。

我々は、所有権、誰の土地ということばかり考えます。しかし、景観というのは、誰が持っているかとか境界なんて関係ないわけです。公共の場なのに、手が出せないというのは問題だ、というこの話は大事です。

子どもが撮ってきた写真とコメントが、真っ直ぐに本質を指している辺りを学んでいくとすごくおもしろいです。撮ってきた写真を不思議だなと思う気持ちがまちづくりに生かせるという意味で、とても大事な写真です。

・気になる警官？！

道路に立っている事故防止の警官のパネルの写真です。子どもが「夜になると、一部が光って怖い。しかも、どうしてこんなにリアルな顔なの？」と言いました。この写真を撮った2年後に、テネシー大学から来た女性の先生を乗せて車で走っているときに、たまたまこの現場に行ったのですが、これを見た瞬間にその先生は「日本人はこんなものを許すの？なぜこんな気持ち悪いものをつくるの？」と言いました。



私が「ここは三差路で交通事故が多発しているの

で、一旦停止の意味の警告なんです。」と言ったら、「アメリカ人はこんなことをしない。子どもたちの登下校で危ないのだったら、本物の人間、地域の人たちが立つ。」と言いました。

子どもたちも来たばかりのアメリカ人も「風の人」であって、我々はこれを見ると反射的に「スピードをゆるめよう」となります。いい意味で麻痺しているのです。

・大人が陥る鳥瞰的思考

我々はよく写真を撮ってきて、マップを作ります。マップを作るという行為の危なっかしさにある時、気づきました。

福島県いわき市で、景観点検をして、宝物を絵地図にしましょうというコンクールがあり、私は審査員で行きました。

大人は地域の名所、旧跡などいろいろな写真を撮ってきて、それを地図の上に散りばめて、何か提案しようとしています。あるグループは100円バスのルートをつくりました。「ひまつぶしバスラリー絵地図」という題で、100円バスで1時間くらい走ってくると、うちのまちはなんて楽しいんだという提案をしました。いいねえと皆、言ったのですが、この次に出てきた、小6の女の子の絵を見て、私はびっくりしました。「わたしの停留所」という作品でスケッチブックでした。

どんなものだったかということ、この子は学校に徒歩で行っています。しかし、登下校の20分の道のりをバスで走るとしたら、停留所はいくつあるだろうということで10この停留所を作ってきました。1番目は、学校のすぐ前にある田中さん家の縁側でした。縁側でおばあちゃんが座ってみかんを食べている絵です。

この女の子と先ほどの大人の絵の圧倒的な違いは、我々は気がつく、地図を上から見て、つまり、鳥の目で散りばめていきます。しかし、まち歩きの景観は、進行方向に向かって前を見ているわけです。女の子の絵は全部、自分の目の高さで見た立面図です。

もっと言うと、2分ごとに1枚ずつビデオを撮っていったような絵です。

これは、圧倒的に違います。我々が普通、見ているのは目の高さですから、目の高さで見るものを大事にした景観まちづくりというのが景観まちづくり

の基本だと思えます。

・この女の子の発想をどう生かせばいいのか

空間の提案ではなく、このまちを歩きながらどんな経験ができるのかという提案をしていくべきです。このまちをどうしようではなく、このまちをどうしたら楽しめるかということを考えるのが、まちを食べる景観人の仕事です。

上から見るまちづくりは、舞台の配置を考える都市計画です。身の丈の目線を大事にするまちづくりはそうではありません。誰がここを歩けば楽しめるか、何をそこで演じるのか、なぜそこにこだわってみたいか、どんな出来事が生まれるのか、どうやって物語をつなげていくのかということです。

今日の景観点検でも、頭の中のどこかに「この景色の後ろにあれが見えた」という意識がほしいと思います。

③ 「そこにあるべきものがない」ことも撮影の対象 ないものを撮影する!?

以前、八戸の小学校の先生に「もし戻ってきたときに一枚もシャッターを押してなかった子どもがいたら、なぜ押せなかったのか聞いてください。本当は取りたかったものは何なのか。こんなものが撮りたかったと絶対言うはずですから。こんなものが撮りたかったというのを聞いたら授業ができます。」と言いました。

地域の中でも、あるものを撮ってくることは簡単ですが、本来あるべきものがないということを報告するというのも、まち歩きのための一つの武器です。例えば、公園の中に行くと、ベンチがあったら助かるのにベンチがない、ベンチがないことを撮れないけれど、それを報告したいとき、カメラを使わずにまち歩きのために「言う」仕事があるということです。

・八戸市白山台小学校の4年生のつぶやき 「おじいちゃんは、どこのお墓に?」

八戸市白山台小学校で、見てきたものを基に、10年後の白山台ニュータウンを紙芝居にするという授業をしました。すると、お墓の前で子どもたちが肝試しをやっていて、三角巾をつけた幽霊が手を出しているというのを描いたグループがありました。それを見た先生は「どうしてお墓なんて描いたの。お墓なんてないでしょ。」と怒ったのですが、子どもた

ちは「北原先生は10年後の白山台ニュータウンを絵にしなさいと言った。うちのおじいちゃんは78歳で、10年後はたぶん死んでいる。そのとき、うちのおじいちゃんはどこのお墓に入れればいいの?」ということでした。

自分たちが引っ越してきたニュータウンに墓地はなく、おじいちゃんが入るお墓がニュータウンにはない。でも、どうしてもつくりたかったから、この絵で墓地をつくって、そこで子どもたちが肝試しをやって、おじいちゃんが見に来ているということでした。あるべきものがないということをしかりと認識することはとても大事だと思います。皆さんも、こういうのを撮りたいのにないね、というのもぜひ共有してください。

④ 同じものを撮っても、意味の違う写真がある 頭のピントはどこに合せているのか

他の人が撮った写真を見比べてみることによって、こういう撮り方をしたかったのかとわかります。私たちはよく、景観点検に行ったときに「これは同じ写真だ」と言って片づけてしまいますが、その人のピントがどこに合っているかを語り合うことが大事です。

⑤ フィルターをつけて撮ってみる!?

ここにこれがないとどう見えるんだろう、もし自分が70歳のおばあちゃんならどう見えるんだろう、車いすだったらどうだろう、いろいろな立場になって見てみるのが大事です。また、季節や時間を超えたフィルターをつけて、どんな感じなんだろうと考えながら見ることも必要です。

○元気なまち

元気なまちは、まちが輝いてきます。それは自分たちの地域の資源を活かすことで、資源を活かすことを我々は「参加」と呼びます。自分たちの資源を発掘することができる景観人の眼差しが今の地域づくりではとても必要だと思います。

そして、見つけた素材を上手に編集していくことも大事です。それが景観点検でする修景です。「もうちょっとやったら、もっと良くなるのに」という編集作業が必要です。そういうことができる景観人がいるまちこそが、参加型のまちづくりで、景観ができてくるまちだと思います。

○「景観人のススメ」－景観は地域を育て、人を育てる－

これは青森県で景観人養成講座をやった際に、集まった人たちが作ったビデオですが、最初の背景は今から40年前の農村景観の写真でした。この映画を大学の授業で見せたら、前に座っていた女の子が途中で泣き始めたので、どうしたのか聞いたら「田舎に帰りたくなりました」ということでした。山口から弘前にきて3年になるのですが、青森の人たちの作った、地域の映画を見ていたら自分の田舎に帰りたくなったということです。やはり、そういう景色は人の心に訴えるものがあるんだと思いました。

北上にもそういう景色はあります。ぜひ、そういうものを育てていく景観人になっていただきたいと思います。

3. 講座②「景観点検の理論と実践」 「地域のよい景観、悪い景観を点検する」

・広瀬川と大通りの景観点検を班ごとに実施



4. 講座③「情報の整理と修景計画策定」 「修景計画を立ててみる」

・景観点検の内容をもとに修景計画を策定



<修景計画の発表>

・チーム名：Eチーム

ここを出たときに駐輪場がなく、自転車がいっぱいあって出づらかったというのがインパクトが強かったので、駐輪場をつくるというのが、最後のテーマになりました。

駐輪場整備事業では、屋根かけ、白線引き、前輪スタンドを1年以内にやって、駅前の玄関口をきれいにイメージアップを図り、またビルに入りやすくするという効果があると思います。

具体的にどんなことをするかというと、ビル管理会社に、早急に設置を強く要望するということです。



・チーム名：ぬりかえ隊

駅から歩くと、デザインされた街灯などいいところもいっぱいありますが、色に関しては統一されているとはいえ、ところどころ色あせたものなどあります。植栽も、駅前大通りに関しては紅葉も終わりがけて、何もなくなってきています。

今一番、私たちがやりたいのは、駅前大通りの色を揃えるということです。年内にごみ箱や配電盤、標識などの色を塗り替え、景観としての統一感を図りたいし、ポロポロと違う色があるのは見栄えが悪いです。結果として、落ち着いた雰囲気をもたせ、安らぎを与えたいと思います。将来的にはベンチを置いて、休める場所を作りたいと思います。

自分たちでできることは、所有者にお願いして回り、許可を得て、実際に塗るのは専門家に発注をし、わたしたちは塗るお手伝いはできるだろうと思います。

・チーム名：くもの巣はらい

問題があると思った箇所は、電線を埋設することと、標識を可能な限り撤去するという事です。それから、お店の配色についても、いくら歓楽街とはいえ、せせらぎというネーミングにはちょっと派手すぎるお店があります。

それから、せせらぎ緑道の角の公園に避難場所の表示がありましたが、わかりにくいという話が出ました。

いろいろな意見が出ましたが、一番に何をやるかですが、電線の地中化を図りたいということです。上を見るとクモの巣のようで醜いので、早急に埋設化してもらいたいです。電柱のスペースが空く分、もう少し道をワインディングさせて、立ち止まるスペースをつくりたいと思います。そうすると、店に入りやすくなり、売り上げも伸びるのではないかと思います。

具体的には、現在の写真を修正して未来の形をプランニングし、行政には電信、電話等の会社との調整をしていただき、実現したいと思っています。

・チーム名：男山

せせらぎ緑道をもう少しうねりを持たせながら、両側に花壇などを配置し、また、コンクリートむき出しなので、もう少し変えていきたいと思っています。それを市に提案していきたいです。コンクリートそのままの色なので、市から材料をいただければ、吹きつけなどで色は変えられると思います。それから、正方形のコンクリートの構造物があったのですが、自然石に換えればいいのではないかと思います。石の採取や運搬は地元でもできるだろうと思っています。

もう一つ、駐車場の標識がすごく多かったので

が、最初と最後ぐらいにして、もう少し整理できれば、せせらぎから安らぎのある景観になるのではないかと思います。

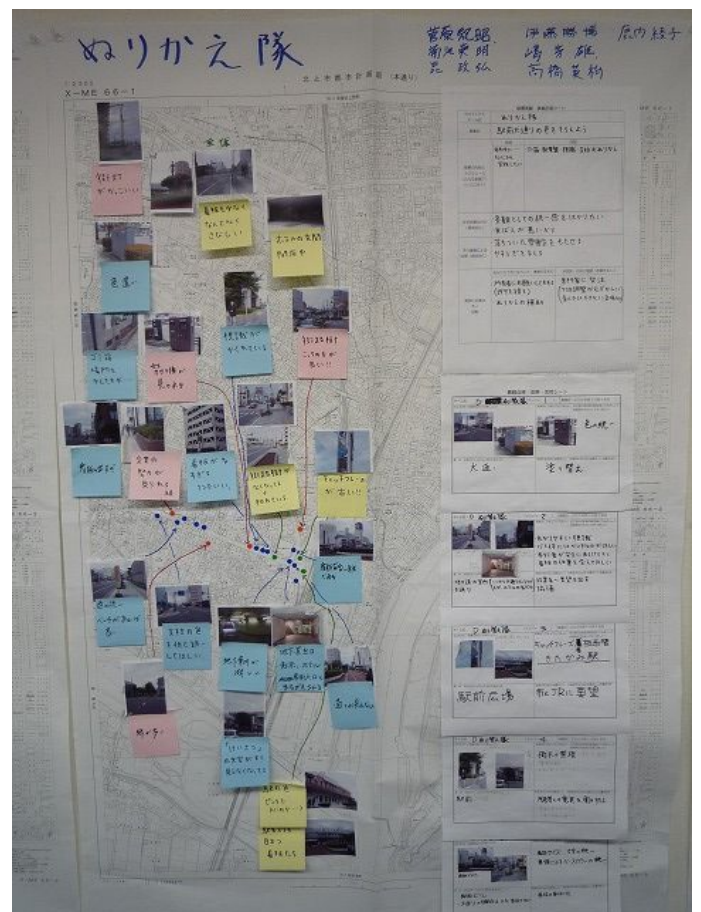
・チーム名：せせらぎ

せせらぎ緑道を今日初めて歩いてみて、感銘を受けました。ですが、一つ一つ拾っていきますと、まだまだ改善点がたくさんあります。電線があまりにも乱れているので地下に埋めたらどうか、花や植栽がバラバラになっているのでまとめたらどうか等ありましたが、特に、水辺にコンクリートが多用されているので、これを改善したらすばらしいせせらぎ緑道になるのではないかという話が出ました。

具体的活動としては、できる限り、「広瀬川まちづくり倶楽部」と相談しながら、もう少し緑地化するために、コンクリートの水辺を改善するという事になりました。オブジェやほとりがあればまだまだいいものができるという話が出ました。

夜の街というイメージがありますが、日中も市民の憩いの場として歩けるようにしていけばもっとういと思っています。

<成果物>



5. 講座④

「今後の景観づくりに活かすために」

弘前大学教育学部副部長 北原 啓司 氏

○感想とアドバイス

見て思ったことと、このようなことを考えたときに我々はどういう活動ができるのかということについてお話ししたいと思います。

・ Eチーム

大通りは景観の施策として、お金をかけて、電線を地中化したりいろいろしているの、手を加えるものがそれほどないはずなのですが、にもかかわらず、Eチームが一番気になったのは自転車でした。

景観というのは決して、ハードだけではなく、そこにかかわる人間の生活行為そのものが景観と関係するので、自転車を置くとか片付ける、そのこと自体も景観として乱れてしまうということを思い起こさせる発表でした。

駐輪というのは必要悪だという話があり、駐輪場がないところもあります。しかし、まちなみを整備したときに気になってしまうということに気がついたという話で、我々の身近な部分に気がついたなと思いました。

駐輪場整備事業として、皆さんに何ができるかという話のときに、自転車で来るまちを考えた場合、市役所がやる仕事は大きいです。私が2年前に見てきた福井県福井市では、コンパクトシティでまちなかを自転車で巡れるようにしようという話をしたとき、新しいお店やビルをつくるときに、駐輪場をセットでつくったら補助金を出そう、つまり、建物をつくるときに自転車を停めるということを想定した建築計画を作ったら優遇するという事です。そういうボーナスを出さないと、みんなわざわざ作りません。持ち主がその気になってくれたら一番ありがたいですけど、なかなか難しいとなると、駐輪場設置による補助というかたちに持っていくと有効な場合があります。

こういう話を役所にしながら、実際にこういうものを設置するための補助制度があるようなまちをたくさん調べてきて、「このまちではこんなことをやっているよ」ということを調べてあげて、行政側がその気になるようにやっていくというのが一番です。われわれ市民グループがオーナーに作ってくれと言ってもなかなかうまくいかないの、そのようにや

っていくと非常にいいと思います。

福井で見てきましたが、自転車というのとは違って、各店の目の前に置く場所がないと意味がないので、2個だけスタンドを置くだけでも効果があるので、そういうことがこのまちにも必要かなと思うので、とてもいいことに気付いたなと思いました。

・ むりかえ隊

発表でもありましたが、先ほど、私も見てきて、「こりゃなんだ」と思うような色やもう少し違う色を塗ればいいのになというのがありました。電柱の灰色もそんなにいい色ではありませんし、最近できた中華料理屋さんも見目があまり良くありません。

統一というのが大事なキーワードだということと、北上の景観計画だとアクセントカラーは10%までなら使えますし、赤はどギツイけれど、アクセントとしてならおもしろいということもあります。しかし、さっき見たときにアクセントカラーというには問題があるところがあったりしました。また、黄色い看板を立てかけたり、せっかく景観整備をしても乱れている部分があるので、むりかえ隊の提案は非常にわかりやすい話です。

私も歩いて一番気になったのは色の話でした。しかし、色を統一することは難しく、「ベースとしてこういう色、その他にこういう色を使っていきたいね」ということをみんなで話し合うことによって、まちなみ協定のようなものをつくったところはあります。日本で一番最初にベースについて考え、できればこういう風にしたいねと提案したのは盛岡の駅前北側です。あそこはアースカラーを基調としています。

このまちなみ、この通りで大事にしたい色があるということ地域の方と一緒に議論していくことによって、今後変な色が出てこないようにできると思います。

景観というのは、ゴールは10年、20年、30年先なので、今たまたま障害要因があっても、建て替えたときにそこが黄色にならなければいいのです。できるだけ早く、地域の人たちと一緒に景観協定のようなものを作り、ルールをつくっておくと、30年後に私たちの子、孫の世代のときにはその景色を見ることができるとい長期戦略でやっていかないとダメです。実際に塗るといのは難しいですが、地域の人たちみんなで色を塗り替えようと参加型でやっているまちもあります。

ただ、結局は行政です。「問題があるな、塗り替えようか」とオーナーが考えたとき、塗り替え事業費を出すくらいの勇気や度量があれば、このぬりかえ隊は面白くなると思います。経費を持ち主が全部もつといたら、不可能だと思うので、そのときに協力できる仕組みをつくってあげたいと思います。

大きな大通りについては、色を変えるとか自転車を整備するという話で、行政側が考えてきた大きな物語の景観ではなく、そこを埋めるような小さな物語に目がいきます。それは、これまでの景観施策で抜けていた部分なので、そこに気付かれたのは大事なことだと思います。

・男山、せせらぎ

広瀬川は、コンクリートの水辺を何らかの形で安らぎを与えるような空間にしたいということです。一概にコンクリートが良くないという話ではなく、コンクリートだからこそ水をせき止める効果もあるのですが、見た目が良くないということを気にしていました。

男山チームからは、コンクリートの素材を変え、自然石を入れれば良いという話が出ました。一方で、せせらぎチームからは、ちょっとしたところに緑を置いたらどうかという話が出ました。

広瀬川は、せせらぎを通し、遊歩道のようにして、夜の街を昼も通れるようにしました。それは景観施策の大きな成果なのですが、あとはつくられた景観を育てていくのが市民の役割です。それはお店の人がやって、というのではなく、あそこをいつも通る市民が、自分たちのかけがえのない道にしようという風に育てていくということが、2つのグループが出していく提案です。花を植えてもらいましょうというのではなく、花を植えていくようなことを市民がやるのは、今けっこう流行っています。

例えば、私が見た青森の事例では、電車の引き込み線だった何もないところに花を植えていきたいと思いますという市民活動グループができて、今そこは花畑になっています。所有者でもなく、関係もないのに、地域の人たちと一緒にやっていくということはおもしろい話です。

この2つのチームがおっしゃっていたようなことは、地域の人たちを巻き込みながら、余計なおせっかいと言われるかもしれませんが、おせっかいもずっと続けていくとありがたくなっていくので、2つのチームの提案をぜひ続けていくと、地域の人たち

もその気になって、あとは地域の人たちがやってくれる、そんな形になってくのではないかなと思います。

・くもの巣はらい

このチームは、ではどうするかとなったときに「お願いするしかない」ということです。先ほど、私が紹介した弘前の事例のように、そこに杉が立っていれば、みんなで苦労して隠したりできるのですが、あそこまでオープンに広げたせせらぎの空間で、電線をどうやってなくそうかという話になってくると、「もっと良くなるという話をして、関係者にその気になってもらうしかない、それができることだ。」ということからも、なかなかみんなも手が出せない部分なのかなという気がします。

ただ、電柱以外の看板の色の話も出てきましたが、私も歩いていて非常に気になりました。せっかく道を歩けるように作って、水もある、そこに新しいお店ができたときにどんなかたちが望ましいのかを、地域の人たちと行政の人たちが話し合っていくようなことをしていくと、やはり電線もなんとかしなきゃという気持ちが行政のほうにも生まれてくる気がします。陳情でいってもどうしようもない話だと思います。

私も、せせらぎ緑道を歩いてみて、ここまでのものをつくっているまちはそうありませんし、これはなかなか上手に作ったなと感心しました。上手に作った割には、色や看板が気になるお店があったので、お店のありかたの勉強会のようなものをやり、ぜひ景観人になっていただきたいと思います。



○これから地域で景観づくりをおこなうために

景観という大きいエリアを要求するのですが、今、国のほうで新しい制度を導入しようとしています。

す。「まちなか『通り』再生プロジェクト」というプロジェクトです。

そもそもはアメリカの「メインストリートプログラム」というもので、中心街の一つの通り沿いの景観、例えば、空き店舗は景観阻害要因ですが、空き店舗に若い人のお店を入れようという仕事も入ってきます。もう一方で、商店街でロゴをつくって、各々が同じものを付けていくという話もあります。あるいは、街灯をきれいにしようという話もあります。プロモーションも組織も全部含めてやっていこうというのをアメリカでやっていて、それを導入したのが「まちなか『通り』再生プロジェクト」です。

今年の7月から9月にかけて、実践するまちを募集したのですが、東北で手を挙げたのは秋田県大館市だけでした。ですから大館で決まりました。全国でも応募したのはたった6つで、当たったのは稚内、大館、小田原です。

このプロジェクトは何を養成しようとしているのかというと、ストリートマネージャーです。ストリートマネージャーとは、「manage to」なんとかする、という意味です。マネージャーというと管理する人というイメージがありますが、部活のマネージャーのように、なんでもする人、その人がいないとやっていけないというような存在です。

その通りに住んでいる人、商売をしている人、そこに関わる人の中から、自分たちの景観をしっかり継続して、自分たちの言葉で考えていける人を1人でも2人でも養成していこうというのがこのプロジェクトです。今、大館では、新しく区画整理するまちで誰を養成しようかとやりはじめました。

「manage to」なんとかする、そういう意味では、景観をつくっていくというより、景観とずっと関わって良くしていこう、ということです。「manage」とは育てる、という意味です。タウンマネージメントとはまちを育てるという意味です。まちをつくるというのは、どんどんつくっていけばいいのですが、例えば、できた広瀬川の空間をどうやって育てていくか、育てていくのに関わっていく市民は何ができるのか、大通りでも色をなんとかできないだろうか、つまり、まちづくりでできてきたものをまち育ての目標として、どうやって育てていこうか、なんとかしなきゃいけない、そのなんとかしなきゃいけないと思った時に、市民が一番力があるわけです。

「メインストリートプログラム」とは、教育プロ

グラムです。ですから、国が大館に出すお金は1年で200万です。しかし、200万で30講座を受け、自分たちができることは何だろうと考えます。景観というのはその地域その地域で答えが違いますから、自分たちがそこでどんなことをやっているのかを考えることがとても大事です。

今日は、くもの巣はらいチームは行政にお願いするしかない、ぬりかえ隊は所有者にお願いするしかないだろうとなりましたが、1回目はこうなんです。「メインストリートプログラム」では、何回も議論を重ねていくうちに自分たちができそうで、尚且つ、インパクトがある作業を見つけていく作業になります。景観は、自分たちが関わることによっていくらかでも変わっていくものだ、育てていけるものだという意識に変わってきていると思います。

そういう意味で、みなさんのアイディアは「まちなか『通り』再生プロジェクト」のプログラムで、自分たちの手で自分たちの景観を育てていけるような、マネージャー育成のプログラムと連動するとすごくいいだろうという気がします。来年は、ぜひ北上も応募するといいいのではないかと思います。みなさんがストリートマネージャーを目指して、勉強会をしていくともっともっと現実的に動かせるような話になるという気がします。

地域のそこに住んでいる人たちとの議論を組み合わせることによって、その地域の将来像を議論していくことが本来の景観整備の姿なので、このようなことを皆さん、ご自分の地域の中でやっていくと、自分の地域でかけがえのないもの、将来には何とかしなければいけないものが出てきます。それを共有することが地域づくりの目標になりますので、そのようなことを景観ではやっていくことが必要だと思います。

景観とは、その景観が大変だと思うような気持ち、なんとかしなきゃという気持ちをみんなが麻痺しないで持てるような手続きとして、このようなワークショップの機会を続けていくこと、そして、自分が地域のマネージャーだと思えるような施策が今、一番必要だということを伝えたいと思います。

今日の景観については、それぞれの個性があり非常におもしろかったです。青森では景観人養成講座を3年間やりました。景観とは継続してやって育てていくという気持ちがとても大事です。

<参加者のふりかえりから>

- ・先生の話の中で「人の行為が景観阻害要因になりうる」との言葉がナルホドと思った。
良い景観とは自然そのものではない。
- ・「景観」私達が感心を持つこと、その上で守り育て作り上げ事の大切さを学んだ。
市民の関心度が上がればもっとスムーズに行くのでは、でも長い期間途切れることなく継続が大切でしょう。
- ・広瀬川のせせらぎの価値を見直したこと。
細部には改善の箇所がいくつかあること。特に、その地域で取り組むこと個人個人が取り組むべきことなどが指摘されるとおもった。
現地調査こそ景観づくりの基本であると思った。
- ・同じ通りを、同じく回っているのに人それぞれの感じ方があった。良いもの、悪いものを探す方法は大変役立つと思います。
- ・今月の課題を景観修景実験事業に置き換えて研修しました。参考になりました。
食べる人を目指します。
- ・自分が地域に帰って本日参加した皆と話をしながら私達がこれからやろうとしている景観事業を今まで以上に進行していきたいと考えます。
- ・景観、感じるという事も、目的を持って観ないと何も出てこない、目的を持って継続的に観る目養う事が大事だと思いました。
- ・せせらぎ緑道を初めて見学しましたが素晴らしい結果ですが更に期待、改善したい点は電線の地下化とコンクリートが多すぎる点「癒し」に程遠い感じを受けた。
今後この景観講座で地域の方々も参加したものにしたい。
- ・実際に自分の目で見る事が一番だと思った。地域の人達との交流も大事
- ・複数の目と感性により思いもかけぬ発想が生まれるものだなあとつくづく思いました。共同作業恐るべし！
- ・地域に帰って景観を観るとき3つの視点で考えること、学んだことを生かしていきたい。
- ・普段なにげなく通っている街並みを歩いていろいろ点検してみると随分違った風景にきずかされた。
街並みの色、庭木の手入れ、街路樹の枯死、地域でもこれから景観についてもっと感心を持ちながら観て歩いて見てみたい。
- ・普段車で通っていて感じないことを今日は感じる事が出来た。街路樹は枯死している。
倒産したホテルが1年もたたないうちに荒んでしまったこと。
- ・普段見慣れた風景でも視線を変えると色々見えてくる。景観イコール心の癒しと思っているので人間にとって居食住に次ぐ癒しは大切なものだ。今日学んだことを地域（地元）に持ち帰って活かしたい。土日は行事が多くキツイ、次回は平日の日中に・・・。
- ・いつも見かけている景観ですが改めて歩いてテーマをもって見るとさまざまな視点からその状況が解かる事が出来ました。
一寸したテーマでこれだけの事柄が解かるのですからテーマを沢山として大勢で考えたらどんなに問題点が出てくるかわいそうです。
- ・自然豊かな地区ですから地域の環境造りに役立たい自然を生かした。
- ・「ハットした事」 結局は自分たちでなんとかするとう事が必要であるとゆう事がわかった。
感想・・・数十名が集まったがほぼ同じ目線（意見）であることに気がつかされた。
喜んでいいのか悲しんでいいのか複雑な印象である。

- ・旧広瀬川の通りが綺麗に整備されている事に気が付きました。更に知恵を出し合って活用する部分がいっぱいあると思います。
公共的な視点で街を見るとゆう経験を初めて今回参加して体験しました。
- ・ハットしたこと・・・自転車置き場について自分たちの生活が景観をこわしてその結果自分たちがいやな想いをすることに気付きました。
なるほどと思ったこと・・・メインストリートプログラムのストリートマネージャーについて街並みは誰か上の人を作るのではなく自分たちが学んで関わるのが大切！
- ・車の通行が多いので歩いてみて普段気が付いていない所の多い事に気付きました。
チームのメンバーとの会話の中でとても多く学ばせていただきました。
生活の利便性で見ていた点が多く景観の視点でとらえることが難しかった。
組織の進行の良し悪しはリーダーで決まるという事が良くわかりました。素晴らしいリーダーでした。
- ・景観についてWSでこんなにも人が集まる事に驚きました。また皆さんとても慣れていてスムーズに作業ができました。私が今回印象に残った事は北上の人の穏やかさです。優しくて周りに思いやり持っている人達ばかりなので街もどんどん良くなって行くと思います。大通りを見ましたが整備されたのにさびしい感じがしました。市民が通りをこれからどう使っていくか考えていく必要があると思います。
- ・完成した街並みを歩いて見て・・・コンセプトを持って継続して行くことが景観街の大切なことと痛感しました。
チームを作って活動をして行く事も良いですね。
- ・市内でも整ってる大道とせせらぎの地区が1時間位の現場確認で沢山の改善点があった。今後、景観人として他地区で活動されるかと思うが、嬉しいような、大変なような・・・。
- ・指定されたコースを、視点を替え見つけるむずかしさと楽しみがありDのメンバーが目標を1つにして纏める手法を知りました。
- ・他の班の駐車場には感心しました。
我班の方は視点が多く何か1つにとゆうことに時間がとられたような気がする。
(それぞれがもっと深く考えなければいけないことでもあったが)
広瀬川に関しては地域の方々と協議して決めたことではあるが十分ではなかった。
- ・午前中だけの参加でしたが北原先生の講義を聞いた後グループの人達と街を歩くと色々知らなかった事や街の様子が目につき楽しかったです。
ありがとうございました。
- ・北原先生の話は、聞いていて楽しいですね。よく現場人としての目線で表情豊かな内容になってました。しかしいずれ、この種のイベントは、ここ2～3年で開きにくくなるだろうと思ってまして、あとはいかに自力更生でどれだけ続けられるかでしょう。
予算ゼロでこのようなイベント講話が続くよう工夫したいものです。
- ・景観とは観たもの全てを吸収してありのままに残すことである。